

①

・兵器の使用量と効果の関係を研究→兵器の数量の算定と効果（死者数）予想

1936 関東軍防疫部（ハルビン） 関東軍軍馬防疫廠（新京）

兼校附 三正 石井四郎、同 一医 北川正隆、渡邊廉、増田知貞、北條圓了、白川初太郎

名称	部隊長	編成月日
ノモンハン事件	陸軍軍医大佐 石井四郎	1939年6月21日
加茂部防疫部■ ■		
北支那臨時防疫給水部	陸軍軍医少佐 北條圓了	1937年7月12日
中支那臨時防疫給水部	陸軍軍医中佐 大田澄	1937年4月18日
関東軍防疫給水部	陸軍軍医大佐 石井四郎	1936年8月11日
北支那防疫給水部	陸軍軍医中佐 西村英二	1940年2月9日
中支那防疫給水部	陸軍軍医大佐 石井四郎	1939年4月18日
南支那防疫給水部	陸軍軍医中佐 田中巖	1939年4月6日
陸軍軍医学校防疫研究室	陸軍軍医大佐 石井四郎	1933年4月1日

	将校	下士官	兵	合計
ノモンハン事件	44	140	811	995
加茂部防疫部■ ■				
北支那防臨時防疫給水部	5	6	31 (雇員 (傭人))	42
中支那防臨時防疫給水部	3	4	35	42
関東軍防疫給水部	220	386	1230	1836
北支那防疫給水部	104	196	510	810
中支那防疫給水部	120	264	895	1283 (1279)
南支那防疫給水部	68	132	465	665
陸軍軍医学校防疫研究室	16	22 (囑託)	270 (雇員 (傭人))	310

※編成年月日は資料により若干異なる 『医学者たちの組織犯罪』の「支那事变二新設セレタル防疫機関」から

2003年時留守名簿での 731 部隊員

軍人 1344人	軍属 2208人
軍医	役職
薬剤	技師
技術	看護婦長
経理	通訳官
衛生	現場監督
歩兵	防疫
砲兵	所属不明 8人

新しく公開された留守名簿から

表4. 関東軍防疫給水部、満洲第659部隊 (昭和23年8月1日現在)

帰還	720
未帰還	2,759
転属	91
死亡	92
	3,662

西山勝夫先生の資料から

「未帰還者」が多いが、実際には、シベリア抑留者以外は帰国している。

実施された細菌戦

- 1939年 ノモンハン細菌戦……チフス菌他
- 1940年 農安細菌戦………PX(ペストノミ)
農安大賚細菌戦……PX(ペストノミ)
ハルビンチフス?
衢州(県)細菌戦…PX(ペストノミ)
寧波細菌戦………PX(ペストノミ)
- 1941年 常德細菌戦………PX(ペストノミ)
- 1942年 浙贛細菌戦………PAノミ、チフス菌、コレラ菌、ペスト感染ネズミ、乾燥ペスト菌が付着した米

PX(ペストノミ)による細菌戦

既に行われた各細菌戦の兵器(PX)使用量を換算して、1kgあたりの効果(死者)を概算した。

第一表 既往作戦効果概見表

攻撃	目標	PX Kg	効果		1.0kg換算値		
			一次	二次	Rpr	R	Cep
15.6.4	農安	0.005	8	607	1600	123000	76.9
15.6.4~7	農安 大賚	0.010	12	2424	1200	243600	203.0
15.10.4	衢県	8.0	219	9060	26	1159	44.2
15.10.27	寧波	2.0	104	1450	52	777	14.9
16.11.4	常德	1.6	310	2500	194	1756	9.1
17.8.19~21	廣信 廣豊 玉山	0.131	42	9210	321	22550	70.3

ノミ1gは約2000匹 9210は2910の誤植

農安、農安・大賚、廣信・廣豊・玉山は地上撒布 衢州(県)、寧波、常德は航空機による空中撒布

[吉林省の細菌戦]

《農安・大賚細菌戦》1940年6月4日から7日実施

京白線の農安(新京の北61km)~大賚間の152kmにわたる農村地帯に、4日間かけてPX10gを撒布。撒布個所から伝播した地域を追跡調査したと思われるが、詳細は不明。

《農安細菌戦》1940年6月4日実施

当時の農安県城内の人口は33000人強。ペスト患者の発生は県城内北西から始まり、城内全域と周辺に広がった。

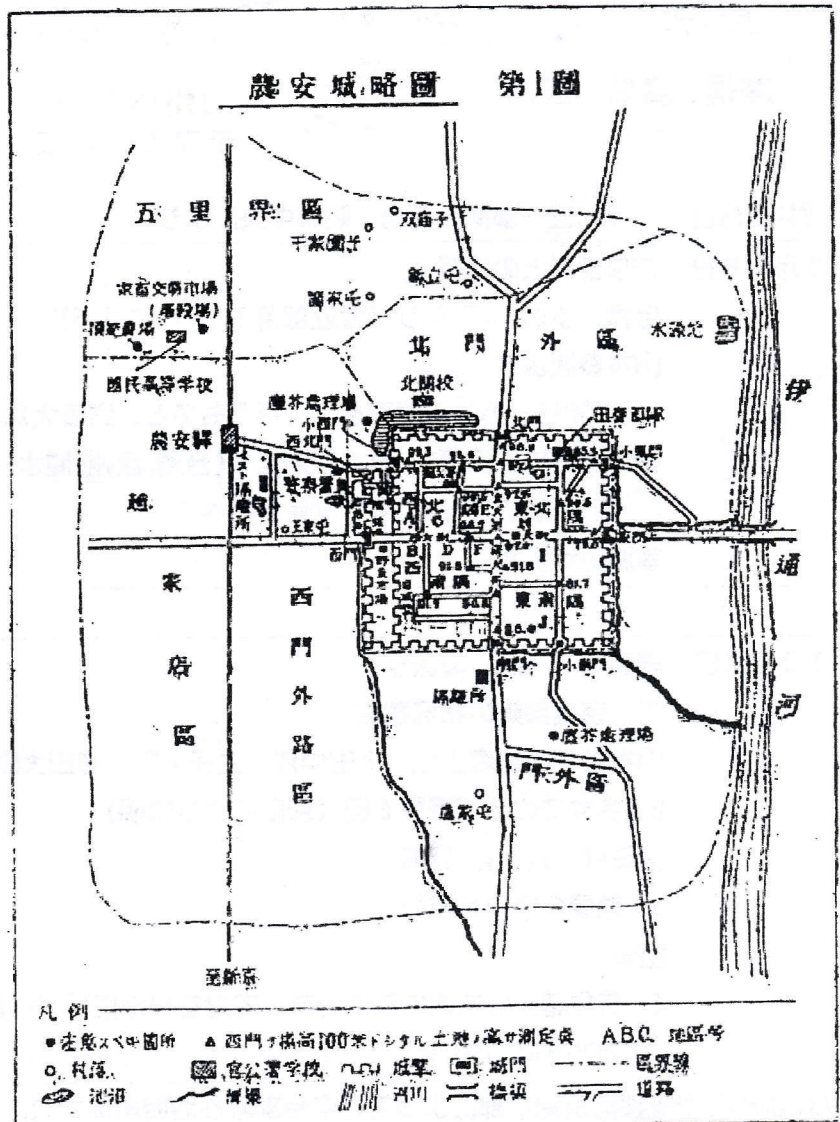
ペストは新京に伝播し9月23日患者が発生、患者28人のうち27人の中国人と日本人が死亡した。

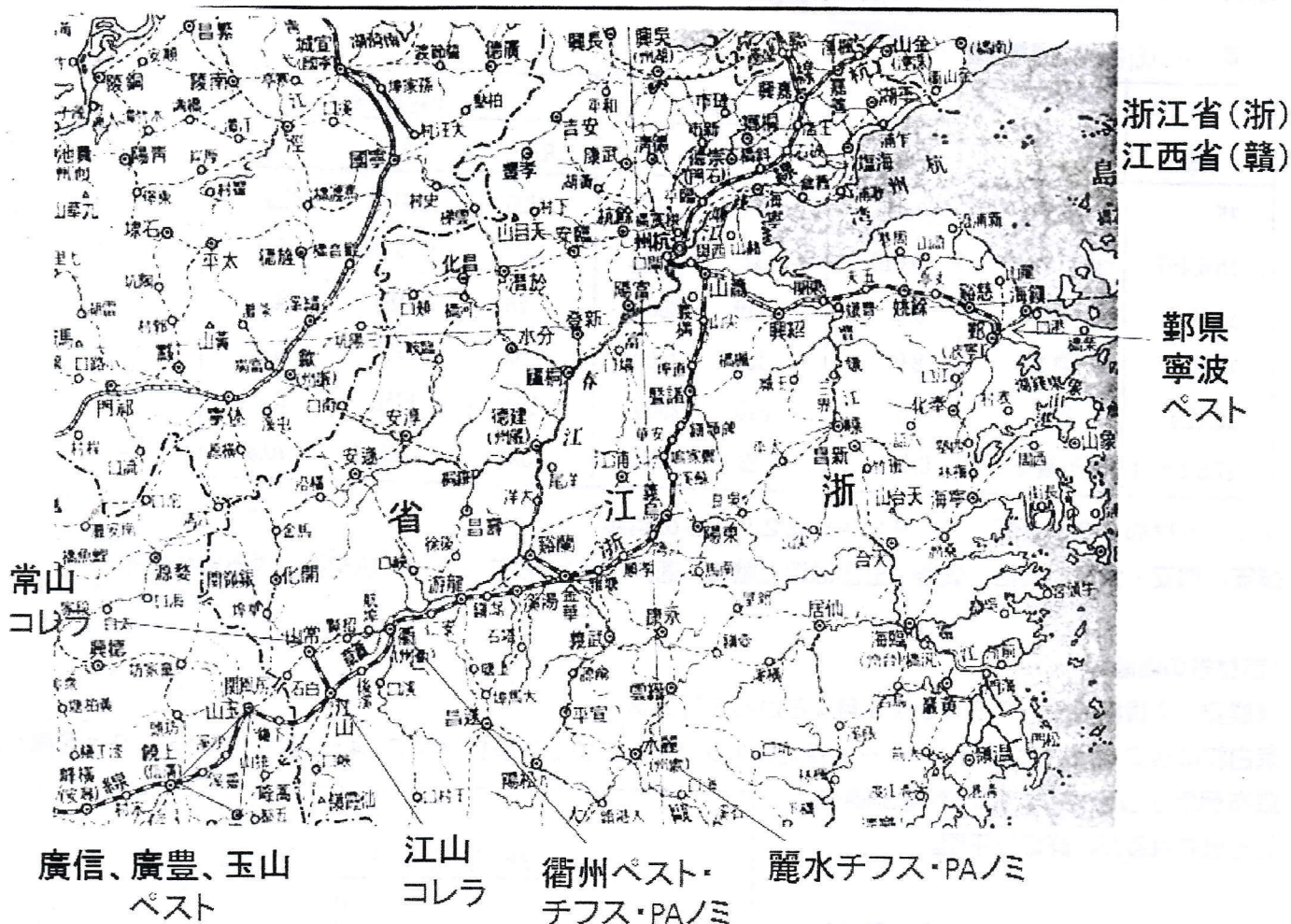
731部隊に関東軍の出動命令が下り、新京と農安の防疫を行った。

《農安・大賚細菌戦と農安細菌戦の目的》

・ペストノミの地上散布により実際に細菌戦が成功するのか、自然流行と細菌戦に違いが生ずるのかの確認。

・疫学、病理などの各種データの収集。





『井本日誌』 『七三一部隊と天皇・陸軍中央』より

9月18日 奈良部隊との連絡

目標、寧波 は可なり（付近部落 1K 平方に 1.5）

山本参謀より

1 希釈せしめたる弾薬を広く行うものと、濃度大なるものを回数少なく落下する場合とあり、後者の為に、目標を 温州に選定す(台州, 温州, 麗水)

2 雨下法決定の為に落下傘使用の件

寧波の海上案

10月7日 細菌戦（実施）の報告

1 奈良部隊の状況聴取

山本参謀、福森少佐、太田中佐、金子大尉、増田大尉

2 今までの攻撃回数 6 回（別表により説明）

ノミは、1g、約 1700

3 効果の判定を期待す

密偵

4 気象諸源は杭州に於て測定して之を現地に移すこととし、落下傘を使用せざる如くす（寧波に対してのみ）

731 部隊と中支那防疫給水部によって、奈良部隊が臨時編成された。

《寧波細菌戦》(1940年10月27日)

航空機により空中からPX2kgを撒布した。

731部隊と中支那防疫給水部は奈良部隊を臨時編成した。

第四圖
投下器



「落下傘」が使用された記録はない。

杭州日本領事が外務大臣へ、1940年11月に寧波(非占領地)に発生したペストが、11月中に約320名の真性患者を出し、その後漸次奥地蔓延の傾向を示しと報告している。

《常德細菌戦》

『井本日誌』

1941年11月4日、増田美保薬劑少佐が操縦する航空機からアワ(ペストノミ)が撒布された。

常德は米や綿などの物資の集散地。周辺農村から多くの人の出入りがあり、常德でペストに感染した人が、自分の村に帰り発病し、さらに家族や隣人が感染した。

※(水)は細菌戦、97軽は97式軽爆撃機のこと

判決
「命中すれば発病は確実」

20/11[11月20日]頃猛烈なる「ペスト」流行、各戦区より衛生材料を集収しあり。

『七三一部隊と天皇・陸軍中央』

6/11[11月6日] 常德附近に中毒流行(日本軍は飛行機一基にて常德附近に撒布せり。之に触れたるものは猛烈なる中毒を起す)。

4/11[11月4日] 朝目的方向の天候良好の報に接し97軽一基出発(四字分抹削)。〇五三〇[5時30分] 出発、〇六五〇[6時50分] 到着。霧深し H[高度]を落して搜索、H800附近に層雲ありし為一〇〇〇m以下にて実施す(増田少佐操縦、片方の開函不十分、洞庭湖上に函を落す。アワ36kg、其後島村参謀搜索しあり)。

一、長尾[正夫支那派遣重]参謀より(水)号の件

11月25日

☆被害者遺族 張礼忠さんの話(張礼忠陳述書27号)

1930年代、私の家族9人が4人の奉公人、徒弟と一緒に常德市の繁華街遼安鎮大慶街(現在の高山巷口長清街)に居住した。父親は印鑑を彫刻する職人だった。腕が優れていたの、商売が繁栄し、家の家屋は200平方メー

在杭州日本領事館

昭和十五年十二月二十六日

在 村 野 領 事 館 印

外務大臣 松岡洋右殿

「ペスト」予防ニトスル件

去月浙江省寧波(非占領地)ニ發生セル「ペスト」ハ十一月中ニ患者約三百二十名ノ重症患者ヲ出シ其後漸次奥地蔓延ノ傾向ヲ示シ最近ノ情報ニ據レハ普下金華、衢縣、(何レモ非占領地)ニモ傳播シ一日平均一、二名ノ患者發生ヲ見ツアル勢ニシテ當州十

トルの広さもあった。

⑥

1942年4月のある日、家の女中毛妹子（当時17才）が病気にかかり、高熱が出た。

その後、第5才の国民、3才の国成も病気をした。医者に見てもらおうと、「ベストだ」と言われた。それを聞いた父は、徒弟王新恂、羅弄山に命じて毛妹子を田舎にある彼女の実家に送らせた。毛妹子が死んだ夜、二人の弟が亡くなった。

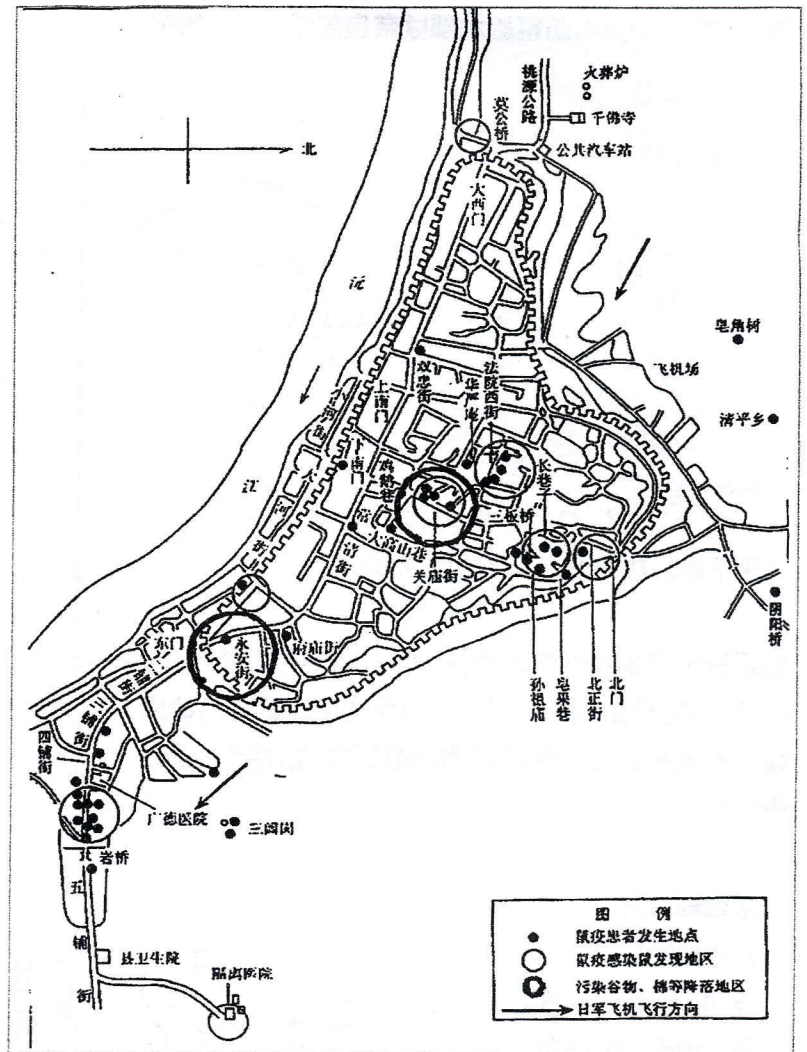
家族は悲しんだが、隣人や警察に知られないように、大声をあげて泣くこともできず、一夜をしくしく泣き明かした。翌朝、父は死んだ二人の弟を寝ているように見せてかごに入れふとんをかけ、警報が鳴った際に、城外に逃れる人込みにまぎれこんで、小西門外の校場坪という場所の南側にある荒地地にこっそりと埋葬した。

祖母は、死んだ孫たちのことを思い出す度に泣き、悲しみのあまり、体が痩せ衰えて、1942年の冬に亡くなった。ずっと故郷の韓公渡郷に居住し、一生農業に従事した祖父も、1943年9月に村にペストが流行した時に、感染して死亡した。

1943年の秋、日本軍が攻めてくる前に、政府が市民に対して城内を離れ、農村地域に疎開するよう勧告した。帰るところがなかった家の女中嚴媽（当時40代）が、一人で残り留守番をさせてくれと両親に懇願し、両親は承諾した。

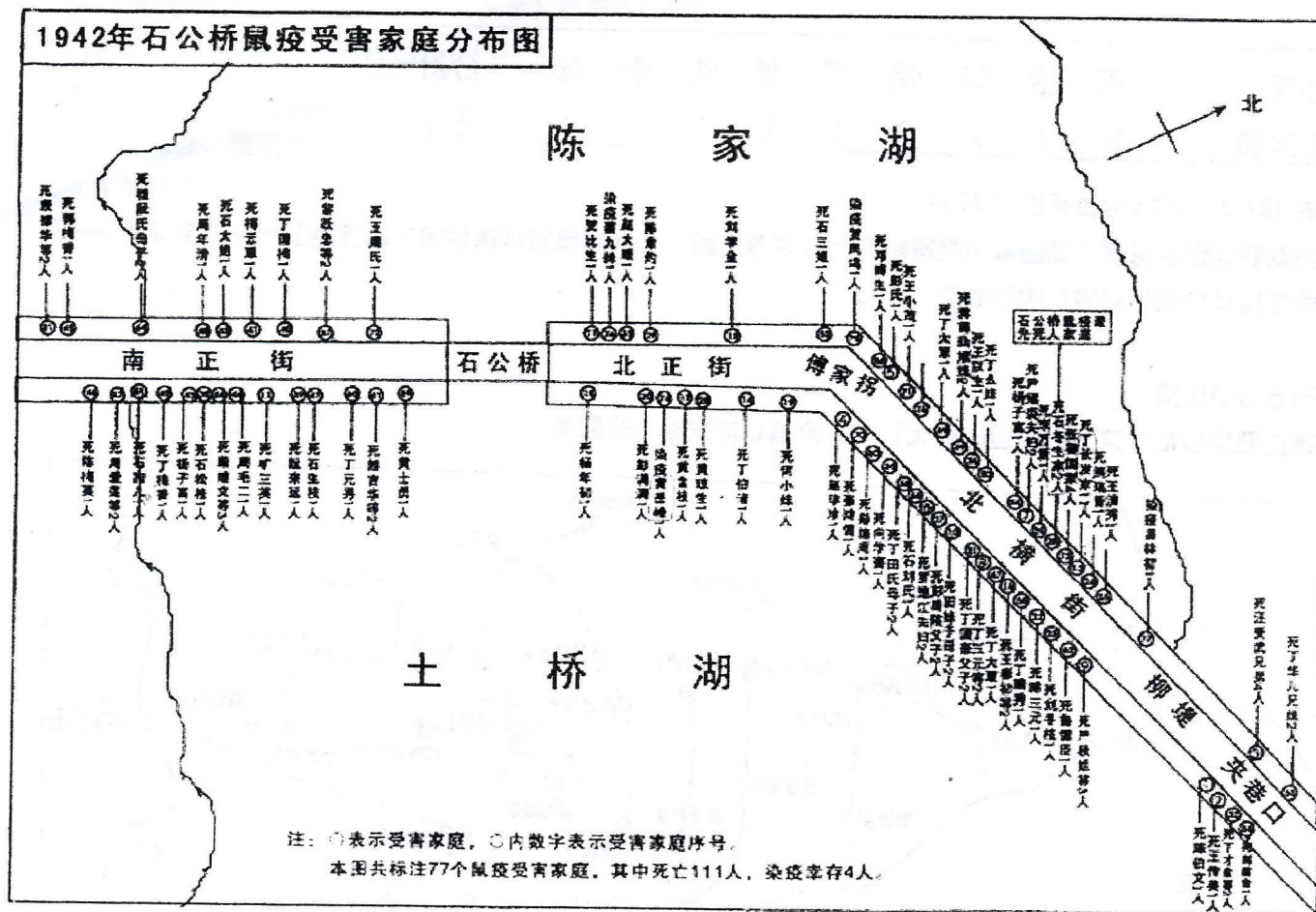
約1ヶ月後、日本軍が撤退し、私たちが家に戻ると、家屋は壊され、室内のものはほとんど奪われていた。そして、嚴媽が庭で倒れて既に死んでおり、体も腐敗し始めていた。下半身が裸で、体に銃剣で刺された痕跡があった。日本軍の暴行によって、我が家ではまた一人が死んだ。

ほぼ2年の間に、我が家では6人が死んで、家屋も焼かれたり壊されたりし、財産もほとんど失った。この大きな打撃を受けて、父は病の床についた。意識も失い、植物人間となった。1944年の秋に、父は死んだ。



民謡、当時の状況について——徳山郷楓樹崗村
医生請不来治病、
親友不敢来登門。
路上無来往行人、
隣居誰也不出門。
道士開路請不来、
一副龍杠抬不贏。
今日抬了你、
明日我得病、
到處一片哭喊聲、
目睹墳山攪心痛。
訳文：
医者は往診に来たくないといい、
友人は尋ねてくる勇氣がない。
路上を行き来する人影は見えず、
ご近所は誰も外出しない。
道士を呼ぶこともできず、
死体は多すぎて運びきれない。
今日あなたを埋葬したら、
明日は私の身が病に倒れる。
あちこちで泣き叫ぶ声がこだまし、
一面の墓を目にして胸が張り裂けそうだ。

周边地域の中心地。人と物資の出入りが多い。111人が死亡した。



②黄岳峰 石公橋鎮

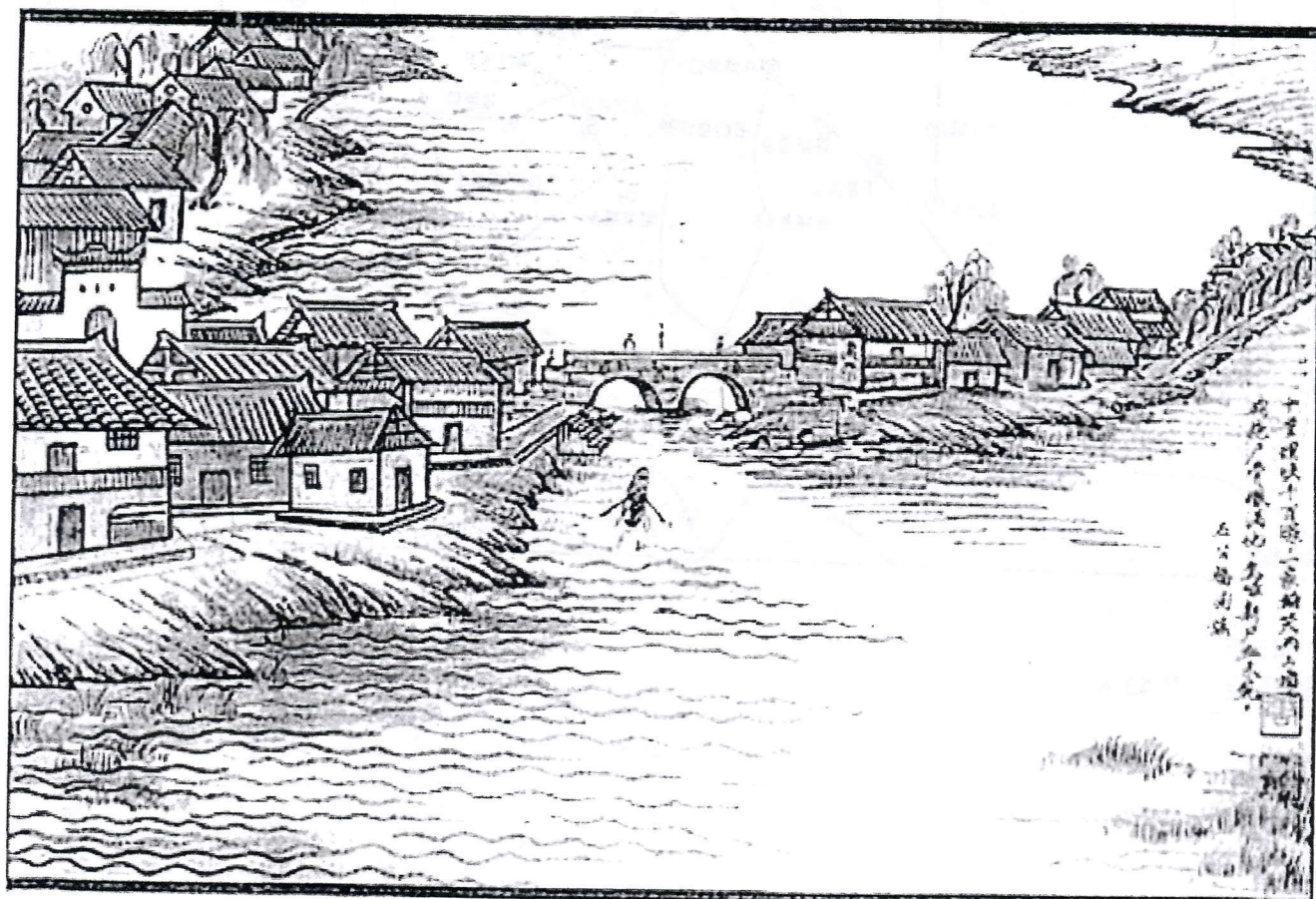


表5 楓樹崗村「絶戸」の家族

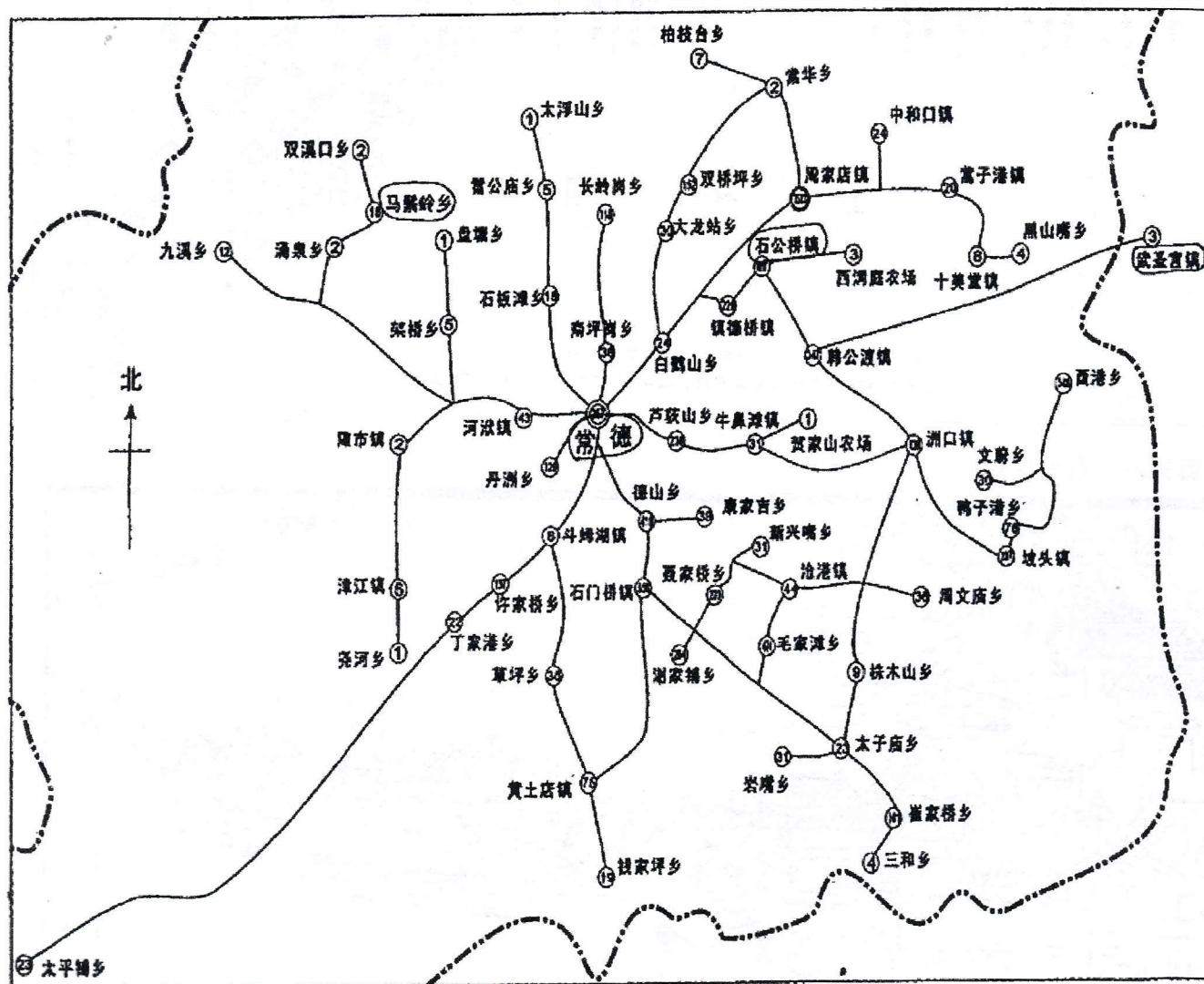
姓氏	王	諸	曾	張	高	龚	建	李	鄭	合計
家族数	8	4	2	2	1	1	1	1	1	21

死者 187 人 家族全員死亡は 21 戸

『轟莉莉鑑定意見書 細菌戦の被害記憶と被害者意識 ——湖南省常德地域での実地調査を踏まえて——』
『中国民衆の戦争記憶』明石書店 から

☆恐ろしい伝播

常德に発生したペストは周辺に拡大した。全滅した家族も多数ある。



～1945年
被害者総数7643人